

研究ノート

コリヤード『さんげろく』 葡語訳注雑感
—在外研修余滴として—

Algumas impressões em torno da tradução portuguesa das
confissões dos cristãos japoneses seiscentistas contidas na obra
de frei Diego Colhado, O.P.

Hino Hiroshi (Universidade Ryūtsū Keizai, Japão)

日埜 博司

1619年から1622年にかけて禁教下の長崎でカトリックの布教を行なったイスパニア人ドミニコ会士ディエゴ・コリヤードという人物がいる。彼が1632年にローマで編纂・刊行した『さんげろく』¹に収められた17世紀日本人キリシタン信徒のいわば「肉声」をラテン文字で綴られたその日本語テキストから現代ポルトガル語へ直し、ポルトガルの読者へ向けた私なりの注釈をそれに附すという作業に夢中で取り組んでいるうちに2004年も年の瀬を迎えた。リスボア新大学社会人文学部海外史研究センター² 客員研究員としての在外研修期間も残すところあと数ヵ月である。まことに幸いなことに、この研究課題に関しては、献身的で誠実な協力者に幾人も出逢うことができたうえ、現地に滞在し、当地の文献学・歴史学・聖書学・西洋古典学を専門とする新進研究者の中に身を置いてこそ掴むことのできた具体的成果は決して小さくはなかったと実感している。

上記の訳注はリスボアもしくはマカオでポルトガルの一般読者向けに公刊されると思われるので、そのためのいわばウォーミングアップとして帰国後ただちにこれを本学の学術誌上に順次発表してゆく心積もりである。今回は、社会学部中村美枝子論叢編集委員の御親切に甘え、上記の訳注に添えるべき序論の一端を雑感風に再構成してみるこ

¹ 大塚光信著『コリヤード さんげろく私注』臨川書店、1985年。この書には大塚光信架蔵の原本本文影印が収められる。

² Centro de História de Além-Mar, Faculdade de Ciências Sociais e Humanas, Universidade Nova de Lisboa.

にする。具体的には、今回の訳業を進めるにあたり私なりに定めた基本方針を幾つか掲げるとともに、作業の過程で考えたこと、考えさせられたことのごく一部を具体例に即し記述してみたい。特にポルトガルに滞在し当地の共同研究者からの示唆なり提案なり要望なりがあつてこそ書くことができたと思える評釈を一部公にしてみたい。

コリヤードが実際にみずからの耳で聴き取り、ラテン文字で『さんげろく』に収めた17世紀日本人キリシタンの懺悔をポルトガル語へ直したいと思ひ立ったそのわけは、何といつても、この稀有な史料が理屈ぬきに面白く、抜群にリアリティーに富み、日本人信徒の、赤裸々とさえ評しうる率直さに心打たれたからである。1999年11月にリスボアで催されたコロック「日本におけるキリスト教」(於、ポルトガル・カトリック大学メデイロス枢機卿記念講堂)の発表テーマにこの『さんげろく』を取り上げたときは、今にして思えば、信徒が用いる17世紀日本語に対する文献的吟味が充分ではなく、現代語からの連想にもとづく単純かつ不用意な誤解を犯している箇所がままあつた。

上記の点を反省してみると、日本語の「さんげ」を一旦現代語へ直し、しかるのちポルトガル語へ訳すという迂回的手続きを踏むことは妥当ではない、という結論へどうしても導かれる。そこで、大阪の清文堂出版から上梓されたエヴォラ公共図書館所蔵の『日葡辞書』³ 影印本を参照し、コリヤードが聞き取った日本語語彙のそれぞれに『日葡辞書』がどのようなポルトガル語の語義を与えているかを吟味しつつ、適宜それをポルトガル語訳に取り込む工夫を試みた。特に現代日本語とは意味の変わっている語彙や、今は用いられなくなった語彙をポルトガル語へ訳す場合、当然のことながら現代語の和ポ辞典は役に立たない。というよりもこれだけに頼っていると大きな誤解に迷いこむ危険が生ずる。『日葡辞書』に収められたポルトガル語の *declaração* が有用性を発揮するのはこのような場合である。『さんげろく』に現われる語彙に関しては、それが『日葡辞書』に記載されるものである限り、そのすべての語釈・例文を脚注に転記し、必要に応じてさらに追記を加えた。そこに現われる日本語の語彙・例文にはむろん日本語を補記した。その際に当然参照すべきなのが岩波書店刊『邦訳日葡辞書』であるが、当地へは持参しなかつたため、『日葡辞書』の読解に関してはすべて原文から行なわざるを得なかつた。ただしそれがかえってよい訓練になつたことは言うまでもない。

『さんげろく』に現われる日本語の語彙をいちいち『日葡辞書』で調べるという手続きを踏んだことは、上記のとおり、正しい葡語訳へ到達するためにきわめて有効性の高い作業であつたと思う。たとえば、現代語と意味の変わっている動詞として «Xicar»

³ *Vocabulario da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues, feito por alguns Padres, e Irmãos da Companhia de Iesu.* Com Licença do Ordinario, & Superiores em Nagasaqui no Collegio de Iapam da Companhia de Iesus. Anno M.D.C.III. Biblioteca Pública de Évora. Res 108. 大塚光信解説『エヴォラ本日葡辞書』清文堂出版、1998年。

[叱る] というのがある。文脈からこれが「腹を立てる」の意味であるという推測はほぼつくものの、最終的な確認はやはり『日葡辞書』で行なうのが妥当である。そしてその結果 «Agastarse» [腹を立てる] という正しい語釈を得た。同様のことは «Caracõ» [からかふ] とか «Isogaxij» [忙しい] とか «Fũfu» [夫婦] とか幾つかの語彙についても該当し、もし『日葡辞書』を参照しなければ現代風に誤った語釈へ導かれているところであった。ちなみに «Caracõ» は «*Porfiar, ou contender*» [激論する, もしくは言い争う]⁴ という意味であり, «Isogaxij» は «*Cousa apressada*» [急くこと]⁵ を表わす。「Fũfu」に至っては, «*Votto, me* [夫, 妻]. *Marido & Molher*» [夫と妻]⁶ と定義されていて現代風に‘夫婦’と考えると正しく解釈できず、『さんげろく』では現に‘夫’か‘妻’か, どちらか片方だけを指して使われていることが大半である。たとえば次の例によりそのことが判明する。モーセの十誡のうち「第九。他のつまを恋すべからず」『ドチリナ・キリシタン』(1600年刊。ローマ字本。水府明德会蔵。重要文化財)に反する罪を犯した告解者の懺悔。上から原ラテン文字に所定の校訂を加えたもの, それを漢字かな交じり文へ翻字したもの, 葡語訳, の順である(以下, 同じ手順を踏む)。

Suye no mandamiento nitçuite, mõxi aravaita iori foca va mofaia voboie maraxenu: tada tanin no fũfu zaifõ vo nozomi marasure domo, sore vo nusumõ to vomoi mo ioranu coto de gozaru. Tada vare mo ano iõna mono vo mottarõ ni va! to bacari zonji maraxita tocorode, sanomi fucai toga de aru mai to vomoi marasuru. Sari nagara, tennen sono nozomi ga vocoru toqi, toniocu, xiny, sonemi nando no toga ni naru fodo no nen ga, mi va mivaqezu xite tori majieta coto mo arõ fodoni, Deus no mimaie ni aru gotoqu ni aravaxi marasuru.⁷

末のマンダメントについて、申し頭はいたより外はもはや覚えませぬ。ただ他人の夫婦・財宝を望みまらずれども、それを盗まうと思ひも寄らぬことござる。ただ我もあのようなものを持ったらうには！ とばかり存じまらしたところで、さのみ深い科であるまいと思ひまらす。さりながら、天然その望みが起こる時、貪欲・瞋恚・嫉みななどの科になるほどの念が、身は見分けずして取り交へたことも有らうほどに、デウスの御前に在る如くに頭はしまらす。

⁴ *Vocabulario*, f.39v.

⁵ *Vocabulario*, f.134v.

⁶ *Vocabulario*, f.106v.

⁷ 大塚光信著『コリヤード さんげろく私注』「本文影印」52 ページ。

Quanto ao nono e décimo mandamentos de Moisés, não me lembro de nenhuns pecados senão aqueles que já confessei. Desejei por certo a mulher e as riquezas dos outros, mas estava longe de roubá-las. Só sempre pensei: oxalá tivesse levado aquelas coisas nas mãos! – não me parecendo isso um pecado tão grave. Contudo, quando me ocorreram de modo natural os tais desejos, sempre estive consciente, segundo me parece, de isso constituir os pecados de avareza, ira, ciúme, etc, sem discernir qual desejo corresponderia a qual pecado. Confesso com reverência o que tenho dito, no sentimento de encontrar-me em digníssima presença de Deus.

話の尻取りのようになって恐縮だが、漫筆のつもりなのでお許しいただきたい。「Votto」[夫]という言葉は現代と同様‘夫’という意味だけで使われたことが『さんげろく』の用例から明らかなのだが、『日葡辞書』は「Tçuma」[つま]という言葉は‘妻’はもちろん‘夫’を指して用いられることもあったと次のように説明する。

Tçuma [つま]. *Esposa, ou molher casada. Item, minùs propriè, Marido, ou homem casado* [妻, もしくは既婚女性。あるいはより本来的ならざる用法であるが, 夫, もしくは既婚男性]. ¶ Tçumani nasu [妻になす]. 1, Tçumani suru [妻にする]. 1, Tçumani sadamuru [妻に定むる]. *Casarse com algũa molher* [ある婦人と結婚する].⁸

私はここまでコリヤードの著書を「さんげろく」とわざと平かな表記してきたが、それは発音がそのようであったことを示すためにほかならない。『日葡辞書』に限らずキリシタン宣教師が作成した日本語研究書や日本語会話の学習テキストは16世紀末の日本語発音を保存した冷凍庫か蓄音機に喩えればわかりやすいと思う。『日葡辞書』に見える「さんげ」の見出しと語釈を引用する。

Sangue [懺悔]. Fagi cuyamu [恥ぢ悔やむ]. *O confessar, & manifestar* [懺悔し明らかにする]. ¶ Zaixōuo sangue suru [罪障を懺悔する]. *Confessar, ou descobrir os peccados* [もろもろの罪惡を打ち明ける, もしくはさらけ出す].⁹

さて上記のとおり、『日葡辞書』の語釈を「さんげ」の葡語訳になるべく多く採り入れた結果、現代文として奇異な印象が少しもなければそれで問題はない。が、共同研究者から、古語の専門家は別としてこれこれの表現は現代ポルトガル人にはまず理解不能

⁸ *Vocabulario*, f.247.

⁹ *Vocabulario*, f.218.

だろうと指摘された場合、それは躊躇なく他の表現へ置き換えた。他方、理解可能なぎりぎりの範囲で古格な味わいを持つ、しかも日本語表現によく対応したポルトガル語を使いたいという気持ちは抑えることができなかった。それは今の日本語以上に複雑かつ厳格な尊敬・敬讓の表現をポルトガル語へ移す際にも該当することであった。《Nasaruru》[なさるる]、《Mesaruru》[召さるる]、《Mesu》[召す]、それから《Goröjeraruru》[ごらうぜらるる]、《Goronjeraruru》[御覧ぜらるる]などの尊敬・丁寧の動詞を訳す場合、*dignar-se* という助動詞に前置詞の *de* と不定法 (*de* は除いてもよい) を続ければよいであろう。あるいはまた、二人称複数形の代名詞 *vós* や *você* の原型である *vossa mercê* を用いて尊敬・丁寧のニュアンスを持たせてもよい。が、これとても、オリジナルの和文が尊敬・丁寧表現であるからといって使いすぎるとポルトガル語文としてはいかなものか、という具合になる。《Itasu》[致す]、《Zonzuru》[存ずる]、《Tatematçuru》[奉る]などの敬讓・謙讓の動詞に至っては、もはやすっきりとしたポルトガル語へ直すことは不可能であり、『日葡辞書』の説明を初出の際、ただ一度だけ脚注に転記するにとどめた。仕上がった葡文が結果として同じになるとしても、日本語オリジナルの待遇表現にまで絶えず配慮をするか、しないか、それによって訳文がもたらすイメージの喚起力には格段の差異が生ずるだろうと思うのだ。

さらに『さんげろく』において告解者は司祭や日本の支配者のことを「パードレ様」「将軍様」「御所様」と必ず敬称の《Sama》[様]を附して呼ぶとともに、地位の高い者に関連する名詞にはこれまた必ず尊敬の助辞である《Go》[御]や《Von》[御]を附すことを忘れていない。適宜これをポルトガル語へ置き換えたいとは思いうけれど、それもやはり程度の問題であって機械的な置き換えは禁物であろう。そこで次の例を見ていただきたい。拙訳ではポルトガル語の語彙と化している *xogun* の前に、敢えて慣用に逆らって *excelentissimo* という絶対最上級の形容詞を附す一方、「奉行」の行為に関しては尊敬動詞が和文で用いられてはいるけれどもそれは無視して通常表現にとどめた。

Mata cono giũ, xõgun sama no go fatto ni xitagatte, sono buguiõ Miiaco iori cudararete, jenacu cono atari no Christian xu vo corobaxe¹⁰ tote, mina ni fan mo suie, Christian no guiõgui vo saxivoqe, xemete vuamuqi ni naritomo corobe to xiqiri ni susumerareta niotte,

¹⁰ Corobaxi [転ばし], Corobasu [転ばす], Corobaita [転ばいた]. *Derribar, ou fazer cair* [倒す, もしくは転ばせる] (*Vocabulario*, f.59). Apesar de surgirem na obra de frei Diego Colhado muitos exemplos de os verbos «Corobu» (cuja raiz é «Corobi») e «Corobasu» (cuja raiz é «Corobaxi») serem utilizados com o respectivo sentido de “apostatar-se” (“«cair»” ou “ficar «caído»”) e “fazer apostatar-se” (“fazer «cair»” ou “fazer ficar «caído»”), todavia não se vê no *Vocabulario* nenhuma declaração de tal sentido metafórico relativamente aos sobreditos verbos.

varera ga nhôbô codomo no inochi vo nogareôzuru tame ni, tçuini cuchi bacari de corobi¹¹ maraxita.¹²

また、この中將軍様の御法度に随って、その奉行都より下られて、善悪この辺りのキリシタン衆を転ばせうとて、皆に判も据ゑ、キリシタンの行儀を聞け、せめて表面になりとも転べと頻りに勧められたによって、我等が女房・子供の命を遁れうざる為に、終に口ばかりで転びました。

Para efectuar a ordenação emitida pelo excelentíssimo xogum [Tocugava Fidetada (徳川秀忠)], veio cá recentemente, vindo do Meaco, o seu regedor. A bem ou a mal, ele forçou-nos a «cair» – renegar a fé cristã –, obrigando-nos a assinalar a escritura comprovante da nossa apostasia e a abandonar o modo de viver cristão. Finalmente, o regedor disse-nos que não se importaria com a conservação interna das nossas crenças e bastaria declararmo-nos «caídos» – apóstatas – só de forma superficial, pelo que prometi «cair» – abandonar a fé – de modo fingido para salvar a vida pelo menos da mulher e das crianças.

次の和文に現われる尊敬動詞・謙讓動詞を機械的にポルトガル語へ直そうものなら、とても読めたものではなくなることは明白ではあるが、他方、せめて「御所様」の行為に対して *dignar-se* というポルトガル語の丁寧表現を二度使うことによってオリジナルのニュアンスの一端を伝えようと試みた。

Sono uie: qionen goxo sama chocuteqi ni go riun vo firacaxerareta miguiri, sore cami fotoqe no go cõreoqu vomotte to voboximesarete, Atago fachiman ni vôtera vo go conriü mesareô tote, sono buguiõ, daiquan xu, fiacuxõ domo ni soresore no bunzai ni xitagatte sono cuiacu vo ategavare maraxita reba, vare va vareto tçucamatçuru mai tameni gentio vo iatôte, chin vo naite naritomo sono cuiacu vo na saxeô to caracutta redomo, sore vo nantomo ca tomo ie tazzune idasaide, ni sando vare ga gentio to tomoni sono cuiacu vo itaxi maraxita. Sari nagara cami fotoqe ni taixite no xingiü no viamai sucoxi mo nôte, tada go canqi vo nogareôzuru tame no chôgui de vori atta redomo, gentio dera vo tçucuru coto va, Christian no tame ni von imaxime de gozarõ to vomoi nagara, vosorete itaxi

¹¹ Corobi [転び], Corobu [転ぶ], Corôda [転うだ]. Cair [転ぶ]. Dôdo corobu [どうど転ぶ]. Cair dando baque, ou fazendo estrôdo [どしんと、もしくは大きな音を立てて転ぶ] (*Vocabulário*, f.59).

¹² 大塚光信著『コリヤードさんげろく私注』「本文影印」18 ページ。

maraxita.¹³

その上、去年御所様勅敵に御利運を開かせられた砌、それ神・仏の御合力をもつてと思し召されて、愛宕・八幡に大寺を御建立召されうとて、その奉行、代官衆・百姓どもに夫々の分際に従ってその公役を宛てがはれまらしたれば、我は我と仕るまい為にゼンチョを雇うて、賃を済いてなりともその公役をなさせうとからくつたれども、それを何ともかともえ尋ね出さいで、二・三度我がゼンチョと共にその公役を致しまらした。さりながら神・仏に対しての心中の敬ひ少しも無うて、ただ御勘気を遁れうずる為の調儀でおりあつたれども、ゼンチョ寺を造ることは、キリシタンの為に御禁めでござらうと思ひながら、恐れて、致しまらした。

Numa outra vez aconteceu o seguinte: quando o «Goxosama» [Tocugava Iyeyasu (徳川家康) ou Tocugava Fidetada (徳川秀忠)] se dignou ganhar a guerra contra o inimigo imperial [isto é, o clã Toyotomi], se dignou julgar que devia atribuí-la ao socorro providencial dos Camis e Fotoques e decidiu fundar uns templos sumptuosos dedicados a «Atago» e «Fachiman». O «Goxosama» mandou que os serviços obrigatórios relativos à construção dos templos fossem distribuídos entre os seus regedores, representantes e lavradores segundo a possibilidade de cada um. Tentei empregar um gentio para evitar participar na construção de tais templos, criando uma artimanha, através do pagamento de uma gratificação, para que ele atendesse àqueles serviços. Não tive, porém, a coragem de lho pedir directamente e participei, por fim, duas ou três vezes, nessas tarefas junto com os gentios, ainda que não tivesse nenhuma vontade no coração de adorar Camis e Fotoques. Era um subterfúgio para não cair em desgraça do xogum. Por fim, cheio de medo e preocupação, fui levado a participar na construção dos templos gentios, apesar de temer que se tratasse de um acto rigorosamente interdito para os cristãos.

すでに引用したさんげにも現われる「転ぶ」という日本語は「棄教する」という意味で『さんげろく』の随所に頻出する。ところが「転ぶ」のこの暗喩的な意味は『日葡辞書』の語釈にはまったく現われない。『日葡辞書』本編ならびに補遺の出版は1603年から翌年にかけて長崎において実現した。1603年といえは家康が江戸幕府を開いた年であり、秀吉によって発布されたキリシタン禁令は有名無実化したとはいえ効力を失ったわけではなかった。ただしこの時期の家康には、キリシタン宣教師の最終的追放に踏み切

¹³ 同上書「本文影印」20 ページ。

ってまで利益の多い長崎貿易を断絶させる気はなかった。17世紀初頭のキリシタン教会を取り巻く状況の一端を明らかにする記事が『日葡辞書』の「序文」(Prologo)に見える。拙訳に原文を附して掲げる。

現在キリシタン教界へ行なわれている幾多の迫害のため、数年来いささか不完全な形であるとはいえ出来上がっていたこの辞書に対し、よりよい査読と校閲を加えるための多少の暇がパードレと日本人イルマンに生じた。そこで、日本の言葉をよりよく知る数名のパードレがこの言葉に造詣の深い数名の現地人の助けをも得て、数年にわたり、この辞書を査閲し増補し磨きをかけることに精励を尽くした。この辞書を望まれるような完璧さをもって世に出すことができるのはそうした精励の賜物である。というのは、日本の言葉はいとも語彙が豊かであるうえ用法においても多様性に富むからである。すなわち書状の文体、書物の文体、親しみある会話のスタイル、説教で用いるスタイルがそれぞれ別なのである。さらにこの言葉にはシナの語彙が多数入りこみその中で一体化しており、それらの語彙を説明するためにはシナの書物と文字を心得ている必要が大いにある。しかしながら、これまでに尽くされてきた努力と精査により、我らヨーロッパ人ばかりではなく日本人もまた、この労作からは多大の益を被るであろう。なぜなら語彙の普通の意味や通常の用法ばかりではなく、常用の外にある隠喩的な意味や用法、さらには談話でも書物でも用いられる、多数の、いとも多様性に富む雅やかな話し方までがこの書物には解説されているからである。

Agora que com as muitas perseguições desta Christandade vagou algum tempo mais aos Padres, & Irmãos Iapões pera reuer, & examinar melhor os Vocabularios, que estauão ja ha annos feitos posto que imperfeitamente: alguns dos que melhor sabião a lingoa de Iapão, com a ajuda tambem de alguns naturaes entendidos nella nos aplicamos com diligencia por alguns annos a examinar, acrescentar, & aperfeiçoar este Vocabulario, o qual se não sair tam perfeito como se deseja, por ser a lingoa de Iapão mui abundâte, & varia no vso, sendo hum o estillo das cartas, outro o dos liuros, outro o da pratica familiar, & outro o das pregações, & tendo esta lingoa encorporadas em si muitas palauras da China, cuja declaração depende muito dos mesmos liuros, & caracteres da China: todauia segundo a diligencia, & exame, que se tem feito he obra de que os nossos se ajudarão muito, & ainda os Iapões: Por que se declara nella não somente o sentido corrente, & vso ordinario dos vocabulos, mas tambem o extraordinario, & metaphorico, & muitos, mui varios, & elegantes modos de falar que tem assi na pratica, como na escritura.

このように打ち続く迫害がかえってイエズス会関係者にゆったりと日本語辞書編纂に打ち込む時間的余裕を与え、その結果として『日葡辞書』のような日本語研究の傑作が生まれた、という経緯が明白に読み取れる。しかもその迫害もやがて始まる残酷な拷問なり処刑なりを伴うものではおそらくなく、クリシタンを嫌う家康の意図に表面上の恭順を装って目立った布教活動を控えてさえいれば大した問題は起きないという程度のものであったであろうから、「転ぶ」という語彙の暗喩的な意味を『日葡辞書』に記載する必然性もまた生じなかったのであろうと、私は想像する。

それはともかくこの「転ぶ」あるいは「転ばせる」、これらを単純明快に *apostatar-se* あるいは *fazer apostatar-se* と訳せば誤解の余地はなくなるであろうが、それには何となく「藝のなさ」を感じず。「転ぶ」という語彙が喚起する視覚的イメージの伝達が不足していると考えられるのだ。さらに「転ぶ」と「棄教する」とが果たして完全に同一の意味を持っていたかどうかにも再考の余地がある。「棄教する」とは異なり、「転ぶ」には、役人に強制されてやむなく踏絵を踏むけれども、心中には信仰が残っておりいつか再び「信心戻し」をする意思があるという含意を感じるのである（そのような人々を真っ当なキリスト信徒と呼びうるのかという疑念はポルトガルの一般読者から当然起きるのであろうが、「弱いクリシタン」に関する脚注22で触れるとおり、彼らのようなタイプを頭から無視してかかるなら日本クリシタン史の研究から重大な一側面が欠落することになると思う）。そこで検討の末、「転ぶ」が有する含意を少しでも残すため、文字どおり「転ぶ」を意味する *cair* という自動詞を《 》に括りそのまま「棄教を誓う」の意味に転用する、あるいはまた、その過去分詞 *caído* を用いて *ficar caído* という表現を仮にこしらえその *caído* も《 》に括るという便法を、私は後述する共同研究者のひとりルシオに提案した。彼は大丈夫、それで判ると言う。私にはこの便法にまだ一抹の不安があるのだが、注釈を付けてもこのポルトガル語表現は「転ぶ」「転ばす」の用例すべてに用いてみようと思っている。

こうして日本語テキストに最大限の「忠誠」を払いつつ現代ポルトガル語としてのモジュストすなわち最も適切な表現なり語彙なりを選びつつ翻訳を進めた。この作業に全篇にわたり協力してくれたのは日本研究を志すルシオ・デ・ソウザ（*Lúcio Manuel Rocha de Sousa*）という青年である。彼は『さんげろく』の内容そのものにも関心を持ち、私の寮に週一回現われて訳の一言一句へ徹底した吟味を加えてくれた。ルシオは単に私のポルトガル語だけを見てそれを訂正するという、言わば手抜きを決してやらない人であった。少しでも論理の流れに疑義を感じたり文意に混乱があつたりすると、ここのオリジナルはどうなっていると私に尋ね、和文の微妙なニュアンスを説明させる。『日葡辞書』の語釈を援用して行なう私の説明に納得して初めて訂正の具体的指示を出す。さらに愉快的なことに、仕上がった訳文を繰り返し私に音読させる。私の葡文音読を聴いたうえで、

ここの表現は耳に快く響く、あるいは、そこの言い回しは文法的に正しくとも耳障りである、という感想をしばしば口にする。私の書いた文章から受ける聴覚的印象を、文法的な正しさ、行文の滑らかさ、用いる単語の妥当さ、論理の堅牢さと同様、大事にするのである。ルシオの査読に私が全幅の信頼感を覚えるようになったのは、彼がそのような言語感覚の持ち主であると知ってからである。今回取り組んでいるのが、日本人信徒の文字どおり「生の声」であってみれば、耳に心地よく響くポルトガル語訳文の作成はぜひとも実現したいことである。

私どもにとっては当然すぎて注釈に値しないと思われる日本語の表現、さらには日本の慣習なり日本的なものの考え方に関して、ルシオの指摘のおかげでポルトガル人読者の理解を助け、かつ興味を高めるであろう注記を加え得たこともありがたかった。

『さんげろく』にはたとえば「弱いキリシタン」という表現が現われる。私どもにとっては何ら奇異に当たらぬ言葉なのだが、幼少期に繰り返し『聖書』を熟読したというこの学究によると、日本のキリシタン迫害史に何の知識も持たぬポルトガルの一般読者には、この表現、字面の易しさとは裏腹におそらくは理解しにくく映るだろうという。キリスト教はユダヤ教ほどの苛烈さはなくとも、本質的には正邪二元論の宗教であるから、いやしくもキリシタンと呼ばれた人々は本来皆一元的な存在であるはずだ。「弱いキリシタン」とは早い話、「棄教者」のことではないのかと。

「弱者の救い」「弱き信仰者への共感」をみずからのキリスト教文学の一主題に据えた遠藤周作の作品に親しんだ者なら、あるいは日本キリシタン迫害史の知識を多少とも有する者なら、キリシタン時代の日本人信徒がそのような善悪正邪のナイーブな二元的宗教観で割りきれない存在でないことはただちに理解できる。「正しく」殉教するか(白)、「邪道として」棄教するか(黒)、だけで正邪を判断し弁別する単純な二元論では17世紀迫害下の日本人キリシタンの全体像をとらえることはできなくて、踏絵を踏めと命ぜられればただちに踏むけれども、その後で「信心戻し」を願い出るといようなグレーゾーンのキリシタンこそが多数を占めたのではないかというのが、私の密かな想定である。

日本で作業を進めるのではとうてい受け取ることのできないこのような有益な示唆を受け、私は、遠藤の名作『沈黙』に登場する「弱虫」の象徴キチジローの台詞を借り、「弱いキリシタン」をポルトガルの一般読者に明確にイメージできるようなやや長めの評釈を書いてみた。「弱いキリシタン」の心理的風景をオーソドックスな手順で実証する試み、これを放棄するわけではないけれど、人間の心の内部を覗こうとする行為が果たして史的文献による実証だけで可能なものであろうか。

「弱いキリシタン」という言葉が現われるのは次の箇所である。迫害下、「南蛮坊主」すなわちキリシタン司祭に宿を提供しないという誓いを異教の神々にかけて立てた一信徒の懺悔に対し司祭が与えた誠告。南蛮坊主に宿は貸さぬという誓文をなした者どもは、

もはやキリシタンではない、控えめに見ても弱虫のキリシタンにすぎず、そうした連中はごく自然に早晚もとの宗派へ立ち返るであろうという、そういう噂を立てさせるような誓文自体が“あぶない”誓文だと論している。

Padre ni iado vo casu mai to misamano xeimon nitçuite: mazzu; cami fotoqe va nandemo nai¹⁴ coto naredomo, gentio domo, buguiö, tono, goxo sama mademo mina no vomovaruru iö va, sadamete tatoieba Atago fachiman, Amida nandoni caçete Nanban¹⁵bözu¹⁶ ni iado vo casu mai to xeimon xita mono domo va, mofaia Christian de nai; xemete iovai¹⁷ Christian de, vonozzucara faiö maie no gotoqu ni narö to micaguitte¹⁸ iuaruru fazu de gozaru tocorode, abunai¹⁹ xeimon to zonji marasuru.²⁰

パードレに宿を貸すまいと三様の誓文について。先づ、神・仏は何でもないことなれども、ゼンチョども・奉行・殿・御所様までも皆の思はるる様は、定めて喩へば愛宕八幡・阿弥陀などに掛けて南蛮坊主に宿を貸すまいと誓文した者どもは、もはやキリシタンでない、せめて弱いキリシタンで、自ら早う前の如くにならうと見限って言はるるはずでござるところで、あぶない誓文と存じまらす。

No que diz respeito aos três juramentos de não agasalhar os padres. Embora seja certo que ter feito o juramento pelos nomes de Cami e Fotoque é uma coisa de pouco momento, todavia, não só os gentios mas também o «Bughiö», o «Tono» e até «Goxosama», segundo

¹⁴ Nandemo nai [何でもない]. *Cousa de pouco momento, ou proueito* [ほとんど重要性、もしくは有益さを持たぬ物事]. *Vt*, Nandemo nai coto [何でもない事] (*Vocabulario*, f.176v).

¹⁵ Nanban [南蛮]. Minamino yebisu [南の夷(戎・胡)]. *Partes do sul* [南の諸地方]. *Vt*, Nanbangocu [南蛮国]. *Reinos da partes do sul* [南の諸地方にある国々] (*Vocabulario*, f.176).

¹⁶ Bözu [坊主]. Böno nuxi [坊の主]. *Religioso que tem sella propria, ou ermida. Item, Qualquer religioso, ou rapado* [みずからの僧房、もしくは小礼拝堂を有する宗教者。あるいは誰であれ聖職者、もしくは剃髪者] (*Vocabulario*, f.25v).

¹⁷ Youai [弱い]. *Cousa fraca* [弱いもの] (*Vocabulario*, f.325).

¹⁸ Micaguiiri [見限り], Micaguiru [見限る], Micaguitta [見限った]. *Escandalizarse. i, Espantarse, ou estranhar algũa cousa mal feita em alguém de quem se tinha outro conceito* [考え方の異なるなんぴとかによって拙く行なわれた物事に気を悪くする、すなわちぞっとする、もしくはそれを非難する] (*Vocabulario*, f.158).

¹⁹ Abunai [危ない]. *Cousa perigosa, ou posta a perigo* [危険なもの、もしくは危険に直面しているもの]. Abunasa [危なさ]. Abunö [危なう] (*Vocabulario*, f.1v).

²⁰ 大塚光信著『コリヤードさんげろく私注』「本文影印」62ページ。

me parece, escandalizar-se-ão e espantar-se-ão. Os mesmos dirão que, aqueles que juraram de não prestar refúgio aos «Nanbanbōzu»²¹ – religiosos de Namban – pelos nomes de, por exemplo, «Atago fachiman» e «Amida», já não são cristãos – e caso o sejam, serão cristãos fracos²² –, e que tais sujeitos voltarão facilmente à sua seita anterior. Julgo

²¹ A palavra «Nanbanbōzu» [南蛮坊主] quer dizer «os missionários católicos oriundos de Macau e das Filipinas».

²² O sentido da expressão japonesa «Iovai [Youai] Christian» – cristãos fracos – aparecendo neste contexto deveria ser, segundo creio, assaz difícil de captar – especialmente a partir da óptica ocidental cristã que procura distinguir simplesmente o bem do mal e discernir facilmente aquilo que é justo daquilo que é injusto –, sem uma devida compreensão para com a situação encurralada em que se encontravam os cristãos japoneses perseguidos na primeira metade do século XVII – a maioria esmagadora dos quais não puderam deixar de pisar a «Fumiye» e manifestar a sua vontade de abandonar a fé, mesmo de forma superficial, de maneira a salvar a sua própria vida ou, pelo menos, a dos membros da sua família –, situação essa que é bem simbolizada pelas seguintes palavras que Endō Shūsaku [遠藤周作] (1923-96) faz dizer Kichijirō, uma das personagens mais importantes na sua obra-prima *O Silêncio* (*Chinmoku*) [『沈黙』] (1966): «Nanno tameni, kogen kurushimiba Deus samawa orani nasatto yaroka. Padre, oratachia, naanmo waruka kotoba shitoran toni» [「なんのために、こげん苦しみばデウスさまはおらになさっとやろか。パードレ、おらたちあ、なあんも悪かことばしとらんとに」] (Endō Shūsaku, *Chinmoku*, Shinchō Bunko, 1981, p.83). Tradução portuguesa: «Porque é que o reverendo Deus me dá uma agonia tão intolerável como esta? Padre, nós fizemos alguma coisa ruim que mereça a agonia que sofremos?»

A tentativa de criticar – quer com simpatia, quer sem paixão – a atitude e mentalidade de tais «Iovai [Youai] Christian» já não constitui uma tarefa pertinente ao historiador nem ao filólogo, pois creio inteiramente impossível penetrarmos e conhecermos o verdadeiro coração dos cristãos forçados a escolher uma das duas hipóteses, isto é, a sobrevivência através da apostasia – mesmo superficial – e a morte decidida por via da inteira manifestação da fé.

Pois bem. Um dos temas mais fundamentais comuns à maioria das obras literárias – inclusive a sobredita obra-prima *O Silêncio* – da autoria do escritor japonês (católico) Endō é a salvabilidade ou não dos crentes «fracos». No que diz respeito à descrição da atitude e mentalidade típica de tais cristãos «fracos» aparentemente pertencentes à maioria esmagadora, segundo me parece, da cristandade japonesa, não se pode encontrar, tanto quanto eu sei, outro exemplo melhor do que a fala que Endō faz dizer Kichijirō. Ele ofereceu ao padre Rodrigo, protagonista do romance, várias conveniências e ajudas de maneira a que este pudesse sobreviver num canto da ilha Kyūshū de forma escondida, mas, por fim, ele vendeu-o, assim como Judas vendera Jesus Cristo, denunciando o local onde se encontrava às autoridades do xogunato, tendo-se deixado cegar pelo prémio pecuniário a ser entregue aos delatores. Cristão «fraco» na típica acepção da palavra, Kichijirō, todavia, não deixa de

confessado ter pisado a «Fumiye» e tendo reconhecido a crença tão forte dos antigos companheiros já martirizados, diz o seguinte na linguagem local de Nagasaki, em voz tão alta para que o padre e os outros cristãos «fortes» metidos na prisão o ouçam bem:

«Jaga, oinyaa oino iibunga atto. Fumieba funda monniwa, funda monno iibunga atto. Fumiewoba oiga yorokonde funda todemo omottotoka. Funda kono ashiwa itaka. Itaka yoo!. Oiwo yowaka monni umaresasete okinagara, tsuyoka monno maneba seroto Deus samawa oose idasareru. Sorewa muri muhō to yū mon jai» [「じゃが、俺にゃあ俺の言い分があつと。踏絵ば踏んだ者には、踏んだ者の言い分があつと。踏絵をば俺が悦んで踏んだとでも思つとつとか。踏んだこの足は痛か。痛かよオ。俺を弱か者に生れさせておきながら、強か者の真似ばせろとデウスさまは仰せ出される。それは無理無法と言うもんじゃい」] (Endō, *Chinmoku*, pp.178-179). Tradução portuguesa: «Apesar disso, eu é que tenho a minha própria razão. Aquele que pisou a “Fumiye” também tem a sua própria razão. Vós pensais que pisei a “Fumiye” com prazer? Dói-me o pé, pé esse que a pisou. Ah! Dói-me este pé. Apesar de ter-me criado como um homem fraco, o reverendo Deus digna-se ordenar-me que imite os crentes fortes. Isso não é razoável nem legal!».

O padre Rodrigo, perante as repetidas insistências por parte de Kichijirō, foi obrigado a ouvir-lhe a confissão, mas com bastante relutância. Kichijirō faz confissão quase gritando de maneira a fazer os outros crentes ouvi-la:

«Kono oiwa korobimono datomo. Datote hitomukashi maeni umareawasete itanaraba, yokaa kirishitan toshite haraisoni maitta kamo shiren. Kogenni korobimono yo to shintoshūni mikonasarezu sundade arimashōni. Kinseino tokini umareawasareta bakkarini..... Urameshika. Oiwa urameshika» [「この俺は転び者だとも。だとして一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切支丹としてハライソに参ったかも知れん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑されずすんでありましように。禁制の時に生れあわされたばかりに.....恨めしか。俺は恨めしか」] (Endō, *Chinmoku*, p.181). Tradução portuguesa: «Sim, sou cristão “caído”. Isso reconheço. Apesar disso, se tivesse nascido numa época um pouco anterior, teria podido ir ao paraíso como um bom cristão, e teria escapado de ser desprezado pelos outros crentes como cristão “caído”. Se eu tivesse nascido numa época sem perseguições..... Que raiva! Sinto raiva!».

Mesmo que eu não saiba se as palavras acima citadas de Kichijirō são aceites com simpatia e paixão junto dos leitores europeus católicos, afigura-se-me completamente impossível captar o comportamento e mentalidade dos cristãos japoneses setecentistas sob a perseguição só através do dualismo simples, dualismo esse que procura distinguir aqueles que são «brancos» – mártires – daqueles que são «pretos» – apóstatas –, ignorando uma camada vastíssima «cinzenta» existente, segundo creio, na história da cristandade japonesa, isto é, aqueles que não se podem tornar mártires nem podem abandonar inteiramente a fé, cujo exemplo típico é Kichijirō.

As autoridades xogunatas de Nagasaki, juntamente com o ex-padre jesuíta Cristóvão Ferreira (já Sawano Chūan), urgem o padre Rodrigo a que abandone a fé, ameaçando que não poderiam libertar três pobres camponeses, os quais estariam a ser torturados no referido momento – apesar de terem renegado por diversas vezes a fé católica –, se ele não pisasse a sagrada imagem de Jesus Cristo. O

perigoso – «Abunai» – o juramento que provoque a dita suspeita e escândalo junto dos gentios.

コリヤード『さんげろく』に収められた日本人信徒の告解を葡語訳する作業と並行的に進めたのは、1999年に『さんげろく』の概容をリスボアにおけるコロックで発表したとき以来の懸案を解決すること、すなわち、カトリックの教えからは野蛮にして不正かつ邪悪とみなされた日本の風俗習慣に関し日本側の視点に立った評釈をポルトガル語で加えることであった。

たとえば『さんげろく』にはモーセの十誡のうち「第六。邪淫を犯すべからず」(『ドチリナ・キリシタン』1600年刊。ローマ字本。前引)に反する罪を犯した日本人信徒の告解が多数採録されている。分類すれば第六誡に関する告解と、それらに対して司祭の行なう誠告が他を圧して多い。当時の日本の性風俗にはカトリックの教え論ず性倫理に抵触する要素がそれこそ充満していたことは、ここからも明瞭である。しかし、『さんげろく』によって図らずも明らかになる17世紀日本の性風俗のかずかずをカトリック倫理だけを基準に単なる淫風陋習と決めつけてしまうのはまったく不当である。そこで17世紀

padre Sebastião Rodrigo, por fim, foi levado a pisar a cara daquilo que mais amava e respeitava, confiando nas vozes que ouviu a partir da imagem de Cristo desenhada na gravura em cobre: «Fumuga ii. Omaeno ashino itasawo kono watashiga ichiban yoku shitteiru. Fumuga ii. Watashiwa omaetachini fumareru tame, kono yoni umare, omaetachino itasawo wakatsu tame jūjikawo seotta noda» [「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」] (Endō, *Chinmoku*, p.268). Tradução portuguesa: «Podes pisar. Relativamente à dor que sentes no teu pé, sou o melhor conhecedor. Podes pisar. Vim a este mundo de maneira a ser pisado por vós, e carreguei a cruz de modo a que partilhasse a agonia que sofreis».

Kichijirō ainda aparece perante o ex-padre Rodrigo, já com o nome japonês Okada San'emom, de modo a pedir-lhe para ouvir a «confissão», dizendo que ainda é possível a Rodrigo administrar-lhe o sacramento. Nessa ocasião Rodrigo tenta explicar-lhe o «intenso prazer e emoção» que teve quando cobriu a cara daquilo que mais amava com os cinco dedos do seu pé, mas em vão. O padre «caído» diz o seguinte a Kichijirō, o qual, já desistido, estava pronto para sair da porta: «Tsuyoi monomo yowai monomo nainoda. Tsuyoi monoyori yowai monoga kurushimanakattato darega dangen dekiyō» [「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できよう」] (Endō, *Chinmoku*, p.294). Tradução portuguesa: «Não há nenhuma diferença fundamental entre aqueles que são fortes e aqueles que são fracos. Quem poderia afirmar que os fracos padeciam menos do que os fortes?». Já o ex-padre não tem hesitação em administrar-lhe o sacramento de confissão, tendo-lhe, por fim, oferecido uma prece: «Vai em paz», com a firme confiança de que ele, mesmo que tivesse traído os religiosos eclesiásticos, nunca traía «aquela pessoa».

前半の日本人の間では、カトリックが罪悪視するある種の性習俗に関し、それを正当化し擁護しようとする倫理コードなり価値観なりが厳として機能していたことを、具体的に明らかにする評釈を幾つか記述した。

今回紹介しようとするのは、当時「若道」とか「若衆の道」と呼ばれたホモセクシャリティーすなわち「男色」に関するポルトガル語の評釈である。次の告解には、男色ばかりか、自慰、独身あるいは既婚女性との不貞、処女の強奪、結婚詐欺的行為、強姦、蓄妾などなど、まさに反カトリック的罪悪（実際『聖書』にはそれを罪悪とする根拠が明記されている）が一堂に列挙されているという趣であり、いくら私でもとうていそのすべてを弁護（？）しきれぬほどだ。

R. Vare va goronjeraruru gotoqu vacai mono de gozatte, sono vie Christian no catagui mo mada xicato mi ni tçucanu tocorode, tçune no tomo mo dôru no mono de gozareba go suiriõ saxerareio. Tocacu itazzura ni io vo suguite, renga no vta vo tçucuri, jõgiũ fudan no monogatari mo sono cata ni cocoro vo fiqiiõxe, tçuini Deus no go fatto, von imaxime, von vosore nitçuite nenqi mo gozaraide chicuxõ no iõni xiqitai no miguruxii mono ni tõgiacu xite ita tocorode, nen mo, cotoba mo, xosa mo cotogotoqu sono nemoto cara ideqi mono de gozatta. Sore nitçuite nhacudõ no nozomi ga vocoru toqi va sonomama xiavaxe vo vcagõte foxii mama ni tçutome, ioi vonna meni cacaru toqi mo, xemete xinjit no cocoro no dôxin to, mata xei vo irete motomuru made iameide, ficqiõ nanigoto ni tçuqete mo, tare nimo xitagavaide toga bacari foriidaxi maraxita. Xicaru tocoroni, maie no confession no nochi, tezzucara mi vo momi atçucõte in vo nagaita coto xigueõ gozatta. Mata votoco to tagaini fagi vo motaxete moraxi morasuru coto mo figoto ni aru. Nhõbõgata ni vochita mo mõsu ni voiobanu. Tocacu tadano mono fitori uonna to neta coto tairiacu xifiacu do amari de gozarõ. Votto no aru vonna mo vovõte, icutabi tova voboie maraxenu. Ichido zzutçu, nido, xi, go rocudo zzutçu gozatta. Sono vchi mata fannen, ichinen, futatçuqi, ninenno mecaqe mo gozatta. Nando zzutçu tomo voboie maraxenu, Tada chõbi ni macaxe maraxita. Votoco uo mixiranu vonna gorocu nin no fajime no fagi vo tori maraxita. Ichinin va damaite nhõbõ vo torõ to iũte nabiqi maraxite, tçuini vocaite cara, ii caiete, sute maraxita. Maichinin va fajime cara iagatta redomo, nacadachi vo tanõde amari susumeta tocorode, tçuini iro iro no iacusocu vomotte tabacatte, sono iorocobi vo motomete cara nanimo togue maraxenanda. Ichinin va mata vare to dôxin xezunba sono mama cubi vo voxii sucumete corosõ to vodoxi ni iũte, sunavachi votoxi maraxite, nochi mo mitçuqi no tecaqe vo mochi maraxita. Nocori no sannin to sando zzutçu bacari vochi maraxita. Mata togueta coto ni

nen vo caquru tabi goto va, sono iorocobi ni fuqeri, musabori nomi mo gozaru.²³

弟子 我は御覧ぜらるる如く、若い者でござって、その上、キリシタンの形儀もまだしかと身に付かぬところで、常の友も同類の者でござれば、御推量させられよ。とかく徒に世を過ぎて、連歌の歌を作り、常住不断の物語もその方に心を引き寄せ、終にデウスの御法度・御禁め・御恐れについて念気もござらいで、畜生の様に色体の見苦しいものに貪着して居たところで、念も言葉も所作も悉くその根元から出来ものでござった。それについて、若道の望みが起こる時は、そのまま仕合はせを窺うて、恣に勤め、よい女目に懸かる時も、せめて真実の心の同心と、また精を入れて求むるまで止めいで、畢竟何事に就けても、誰にも随はいで科ばかり掘り出しました。しかるところに、前のコンヒサンの後、手づから身を揉み扱って淫を流いたこと、繁うござった。また、男と互ひに恥を持たせて、漏らし漏らすことも日ごとにある。女房方に落ちたも申すに及ばぬ、とかくただのもの、独り女と寝たこと、大略四百度あまりでござらう。夫の有る女も多うて、幾度とは覚えませぬ。一度づつ、二度、四・五・六度づつござった。その中、また半年・一年・二月・二年の妾もござった。何度づつとも覚えませぬ。ただ調備に任せました。男を見知らぬ女、五・六人の初めの恥をとりました。一人は騙いて、女房をとらうと言うて靡きまらして、終に犯いてから、言い変へて、捨てました。ま一人は、初めから嫌がったれども、媒を頼うあまり勧めたところで、終に色々の約束をもって謀って、その悦びを求めてから何も遂げませなんだ。一人は、また我と同心せずんばそのまま首を押し竦めて殺さうと威しに言うて、即ち落としまらして、後も三月の妾を持ちました。残りの三人と、三度づつばかり落ちました。また遂げたことに念を掛くる度ごとは、その悦びに耽り、貪りのみもござる。

Sendo jovem de pouca idade, como se vê, ainda não estou bem disciplinado na doutrina nem tenho aprendido a viver de modo cristão. Os sujeitos com quem convivo são-me semelhantes, pelo que deixo à vossa imaginação como é tremenda a minha descrença. De qualquer maneira, sou sempre preguiçoso nos serviços religiosos, gastando todos os dias de modo inútil, e entregando-me à alegria de fazer «Renga», estando todo absorto ordinariamente na conversa sobre o dito assunto. Não dou nenhuma atenção para os mandamentos e admoestações divinas nem presto o devido temor a Deus, e só tenho estado metido e atolado na feia deleitação torpe relativa ao corpo como se fosse um animal,

²³ 大塚光信著『コリヤードさんげろく私注』「本文影印」42, 44 ページ。

acontecendo nos ditos apetites carnis não só o que penso e digo mas também o que faço. Quando me ocorria o desejo de cometer o pecado nefando – a sodomia –, sempre procurava a ocasião propícia para isso e pecava, quando possível, conforme desejava²⁴.

²⁴ Registam-se no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* os dois vocábulos significando a união sexual entre indivíduos do sexo masculino. O primeiro é «Nanxocu» [男色], o qual se define de modo um pouco indirecto como «*Peccado mao, ou nefando*» (f.177v), sendo o segundo «Nhacudō» [若道], o qual significa mais especificamente «*Vacaxuno michi [若衆の道]. Sodomia, ou peccado mao*» (f.181v).

No Século Cristão do Japão, segundo a óptica dos missionários europeus, o pecado da sodomia dos monges budistas tornou-se num dos maiores alvos de crítica religiosa de índole ofensiva. Por esse mesmo motivo existe uma grande diversidade de descrições exemplificando o acima dito. Para a corrente argumentação cito os seguintes dois trechos do Tratado do padre Luís Fróis acerca da diferença cultural Europa-Japão (Luis Frois S.J., *Kulturgegensätze Europa-Japan (1585). Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão*, ed. Josef Franz Shütte S.J. Tōkyō, Sophia Universität, 1955):

«Os nossos mininos insinão a doutrina, santos e vertuosos costumes aos meninos; | os bonzos os insinão a tanjer, cantar, jugar, esgrimar e com elles fazem suas abominasões» (Capitulo 3º-10).

«Antre nós se profesa logo limpeza da alma e castidade no corpo; | os bonzos toda a sujidade interior e todos os pecados nefandos da carne» (Capitulo 4º-2).

No templo Daigoji [醍醐寺] em Kyōto [京都] conserva-se o rol de pinturas chamado *Chigo sōxi* (Scroll *Chigo sōshi*) [『稚児草紙』], o qual já existia aí no ano de 1321. Trata-se de um conto pictórico dos «Chigo» [稚児] – «Minino que aprende nas varelas ainda com cabelo» (*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.47v) – que serviam aos monges budistas no templo Ninnaji [仁和寺] e aí se retratam de modo realista diversas acções de pedofilia entre os bonzos e os meninos. Actualmente as pinturas que se encontram no templo Daigoji estão interditas ao público devido à sua natureza «não-edificante», mas no entanto pode conhecer-se esta abordagem artística através das fotografias contidas nuns livros, como, por exemplo, em *Hirakana Nihon Bijutsushi* [『ひらかな日本美術史』], I, Shinchōsha [新潮社].

Pode confirmar-se um comentário relativo ao dito «pecado» também no texto didáctico que os jesuítas compilaram em idioma japonês para ensinar a doutrina cristã aos crentes intitulado *Nofonno Catequismo* [『日本のカテキズモ』], o qual começa por criticar os religiosos japoneses: «Nifonno voxie, jike, xakeni, tçumi fucaki fujōno kegare ari tote nhoninuo kirōcato sureba, nhacudōto gōxite nanxino irouo mochiyuru coto, sono michi, xigocuno daiacuguiō core nari» [日本ノ教, 寺家, 社家ニ, 罪深キ不浄ノ汚レアリトテ女人ヲ嫌フカトスレハ, 若道ト号シテ男子ノ色ヲ用ル事, 其道, 至極ノ大悪行是ナリ] (Os sacerdotes budistas e xintoístas no Japão costumam ter relações de pederastia – o qual acto é chamado «Nhacudō» –, afirmando que as mulheres são detestáveis por terem sujidade ou imundícia [proveniente do sangue de menstruação e daquilo derramado no parto])

impossível de purificar). O compilador do texto, depois de afirmar que a sodomia é um acto pecaminoso «contaranatçuraru» [コンタラナツラル] – contranatural –, defende: «Xicaruni nhacudōa fanjōno tameni catçute arazu. Cayette sauari naru sunua, sunauachi, xōtucuuo somuqu mudōno acuto xiretari» [然るに若道ハ繁昌ノ為ニ曾テ非ス。却テ障ナル寸ンハ、即、生得ヲ背ク無道ノ悪ナリト知レタリ] (Para além disso, o «Nhacudō» nunca presta para a procriação humana, mas antes constitui um impedimento para isso, pelo que se reconhece claramente que se trata de uma extrema maldade fora de razão e contranatural). Por fim chega a concluir que a sodomia é «Tenrino noriuo coye, chicurui nimo votoru mudō naru giūzai» [天理ノ法ヲ越、畜類ニモ劣ル無道ナル重罪] (um pecado gravíssimo infringindo as leis ordenadas pelo Céu, cujo violador é inferior às bestas), dizendo ainda: «Xococuno fitobito, coreuo fujōno giūquato suru coto, mottomo dōri xigocu nari» [諸国ノ人々、是ヲ不浄ノ重科トスル事、最モ道理至極ナリ] (A gente de vários reinos tem muito boa razão em considerá-la como um dos actos mais sujos e pecaminosos). Cf. Ebisawa Arimichi [海老沢有道] et al. eds., *Kirishitan Kyōrishi* [『キリシタン教理書』] (Série *Kirishitan Kenkyū* [『キリシタン研究』] 30), Kyōbunkan [教文館], 1993, p.51.

O dáimio do reino de Suvō [周防] Vōuchi Yoxitaca [大内義隆], que autorizava a missão cristã por S. Francisco Xavier na cidade de Yamaguchi, era um dos apreciadores da pederastia. Aquando da audiência com Yoxitaca, segundo nos informa o padre Luís Fróis, Xavier, através da interpretação do seu companheiro irmão João Fernandes, referiu-se «aos [pecados] de Sodoma, dizendo que o homem, que cometia tal abominação, era mais sujo que os porcos, e inferior aos cães e a outros brutos animais». Fróis continua a dizer: «Lido este ponto (pelo irmão João Fernandes), parece que, por dar logo muito no coração a el-rey e mostrar no semblante que se tomava desta doutrina, lhes fez o fidalgo sinal que se fossem. E assim se despedirão d'el-rey, sem elle lhes responder couza alguma, porem o Irmão cuidou que os mandasse matar» (Luís Fróis, *Historia de Japam*, I, José Wicki ed., Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976, p.32. Ruisu Furoisu [ルイス・フロイス], *Nihonshi* [『日本史』], VI, tras. Matsuda Kiichi [松田毅一] & Kawasaki Momota [川崎桃太], Chūōkōronsha [中央公論社], 1978, pp.54-55).

Segundo uma interesantíssima observação de Ujiie Mikito [氏家幹人], as expressões japonesas «Hada wo awaseru» (Fadauo auasuru) [肌を合はする] – juntar a pele com a outra – e «Hada wo yurusu» (Fadauo yurusu) [肌を許す] – permitir a pele [a alguém] – eram propriamente aquelas que representavam os estreitos laços de amizade muito profunda entre uma pessoa e outra independentemente da existência ou não de relações físicas (cf. *Edo no Seifūzoku. Warai to Jōshi no Erosu* [『江戸の性風俗——笑いと情死のエロス』], Kōdansha Gendai Shinsho [講談社現代新書], 1998, Cap.6: “Hada wo yurusu to yū koto” [「肌を許すということ」]). A primeira expressão significava (actualmente essa expressão caiu em desuso) «o depositarem a mútua confiança profunda um homem e outro e se fazerem a cooperação cordial», querendo dizer a segunda «o ter uma pessoa uma inteira confiança noutra». Muito curiosamente a sobredita observação pode-se comprovar através da declaração do *Vocabulario da Lingoa de Iapam*. Veja-se o verbete «Fada [肌・膚]. i, fadaye [肌・膚]» do *Vocabulario*, o qual define a palavra: «Superficie da carne, ou corpo humano. ¶ Fadauo yurusu [膚を許す]. Descuidarse, Meliùs, Cocorouo yurusu [心を許す]. ¶ Fadato fadauo auasuru [膚と膚を合

はする]. *Ter ajuntamento o homem com molher. As vezes. Fadauo auasuru* [膚を合はする]: *se diz dos que se vnem, & estão amigos, mas não he muito vsado nem proprio*» (f.76). Após a explicação da frase feita «Fadauo auasuru», o compilador dá especial atenção a esta expressão adicionando uma anotação de que este uso «*não he muito vsado nem proprio*». O compilador conhecia, claro, o sentido «não-edificante» desta frase feita, aconselhando os seus colegas-missionários de modo discreto a não empregá-la, mesmo que compreendessem o seu sentido.

Pois bem. Tendo em consideração o sobredito significado específico da frase feita «Fadauo auasuru», tornar-se-ia fácil entender a razão porque o criado-moço chamado Mori Ranmaru [森蘭丸] com quem Voda Nobunaga tinha «ajuntamento» – mantinha relações sodomitas – lutou valentemente por amor do seu Senhor contra o exército-rebelde de Akechi Mitçufide [明智光秀] e por fim seguiu o seu chefe na morte no templo Fonnôji [本能寺] em 1582. O surpreendente deste episódio consiste no facto de um escritor tão metucioso como Luís Fróis não lhe tivesse feito referência alguma na sua *Historia de Japam*. O missionário jesuíta, segundo creio, ter-se-ia absterido de mencioná-lo e divulgá-lo aos leitores europeus cristãos de forma a que este não manchasse a «honra» nem quebrasse a «resplandescente» imagem como o primeiro magnífico «Danna» [檀那] – palavra essa que é declarada no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* como «*Fregueses, ou deuotos, & professores dalgũa seita*» (f.70v) – do Cristianismo.

Eis aqui outro exemplo notável. Fotta Masamori [堀田正盛] também seguiu o seu senhor Tocugaua Iyemitçu [徳川家光], o terceiro xogun de Yedo, na morte. Quando Masamori cortou a barriga – «*Farauo qitta, I, Farauo caqiqitta, I, Farauo xita*» [腹を切った, または, 腹を掻き切った, または, 腹をした] de acordo com o *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.80v – logo após a morte do seu patrão, não gostava de descobrir a pele dos seus ombros para baixo até à barriga, assim se atrevido a cometer uma evidente desobediência à maneira comum de então, pois ele não desejava exhibir a sua pele a outras pessoas, a qual era exclusivamente «reservada» para o seu chefe que o favorecia muito. O livro que aborda a filosofia dos samurais – «Buxidō» – no período Yedo intitulado *Fagacure* [『葉隠』] informa-nos o acontecimento: Masamori «*gozauomo nauoxitaru mono nite sōrō aida, fadauo mixe mōsu majiki yoxi nite, fada nugui mōsazu sōrō yoxi*» [御蔭をも直したる者にて候間, 肌を見せ申間敷由にて, 肌ぬぎ不申候よし]. Tradução portuguesa: Masamori era um favorito do xogun falecido e arranjava-lhe a esteira de dormir – «*Gozaou nauosu*», ou seja, prestava-lhe o serviço de pederastia –, pelo que, segundo ouvi dizer, ele não gostava de descobrir a sua pele a outros homens senão ao seu senhor já morto (cf. Ujiie, *Edo no Seifūzoku, op.cit.*, pp.174-175).

No período Yedo (1603-1867) confrontavam-se diversos argumentos pró[s] e contra[s] acerca do «Nhacudō». Pondo de parte a posição negando e proibindo absolutamente o costume, falando de um modo geral, a maioria dos argumentadores eram quase unânimes em afirmar o seguinte: «O que é ruim é apenas perder a cabeça tanto com o «Nhacudō» como a compra das «*Qeixei*» [傾城] – «*Molher publica*» (*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.190v) –, assim arruinando-se por causa dos ditos motivos e esbanjando a fortuna. Quer dizer: não é justo nem razoável repreendermos o «Nhacudō» somente, por causa de ser o acto «anormal» entre os sexos masculinos (cf. Ujiie Mikito [氏家幹人], *Bushidō to Erosu* [『武士道とエロス』], Kōdansha Gendai Shinsho [講談社現代新書], 1995, pp.110-112).

Quando me aparecia uma linda mulher, nunca me esquecia de lhe fazer a corte de modo esforçado, até convencê-la, no íntimo do seu coração, a praticar amor comigo. De qualquer maneira, só continuava a pecar, não obedecendo a uma admoestação de ninguém. Mais. Após a última confissão tenho frequentemente esfregado o corpo – o pênis –, masturbando-me. Para além disso tenho caído num outro tipo de pecado com um homem. Trata-se do pecado de masturbação de modo mútuo, isto é, friccionando-lhe com a mão fechada as partes pudendas e, ao mesmo tempo, fazendo-lhe friccionar-me de semelhante

Para além disso, alguns defensores conferiam um sentido positivo ao «Nhacudō», dando ênfase à natureza ética proveniente dos estreitos laços de amizade que os pederastas estabeleciam mutuamente. O samurai no reino de Deva [出羽] chamado Codera Nobumasa [小寺信正] (1682-1754) escreve o seguinte na sua obra intitulada Xigintçū [『志塵通』] (cujo prefácio foi escrito no ano de 1724): «Vacocuno fūto xite nanxocu sacarini voconauaru. Bexxite batmonno cotouo mochiyu. Macotouo camini coraxite xinjitno cocozaxiuo tate, carini kiōdaito chicaite xixeiuo tomo nisu. Xeikenno vokiteni somuquni nitaredomo, vacocuno fūgui ima sutçu bekini arazu. [.....] Core bucocu furuki fū naru yuye narubexi. Namajiino ricutçuuo tate nanxocuno michino rifūo tçucuru coto aru becarazu. Xincocu motoyori ari kitareru fitotçuno comichi nareba, sono mucaxini naraite tasuke vocu bekica. Yo tçuratçura vomōni, cono michini asobu fito, yūuo yaxinai buuo migacuno fitocata ni chicaxi» [和国の風として男色盛りに行わる, 別て罰文の事を用ゆ, 誠を神にこらして真実の志を立, かりに兄弟と誓ひて死生を共にす, 聖賢の掟に背くに似たれども, 和国の風儀今すつべきにあらず [中略] 是武国古き風なる故なるべし, なまじいの理屈を立て男色の道の理非を付る事あるべからず, 神国もとよりあり来れる一つの小道なれば, 其昔にならひて助置べきか, 予つらつら思ふに, 此道に遊ぶ人, 勇をやしない武を研の一かたに近し]. Tradução resumida em português: O «Nanxocu» é um costume tradicional e antigo do Japão. Os samurais têm jurado ser pseudo-irmãos através de estreitos votos de amizade, os quais são um fruto deste costume. Comprometem-se a lutar juntos no campo de batalha e morrer, caso necessário, por amor do seu parceiro, o que fez com que o costume do «Nanxocu» fosse de grande utilidade, no sentido de fortificar o coração e a alma dos samurais. Mesmo que o costume de sodomia tivesse sido advertido no pensamento confucionista, não se deve de modo dogmático negá-lo.

Em suma: por mais severamente que os missionários jesuítas tivessem criticado o «Nhacudō» como um costume nefando e abominável, este funcionava no Japão de então de um modo vigente, particularmente entre a camada guerreira, com um código moral e ético que o justificava e racionalizava, ignorando e até por vezes ridiculizando os mandamentos manifestados na Bíblia Sagrada em relação a «abominação sodomita» (cf. Levítico 18:22 «Não coabitará sexualmente com um varão; é uma abominação»; Deuteronomio 23:18-19 «Não deve existir entre os filhos de Israel nem mulheres nem homens dedicados à prostituição sagrada. Não apresentarás na casa do SENHOR, teu Deus, quaisquer promessas, como salário de prostituta ou ganho de sodomita, porque uma e outra coisa são abominadas pelo SENHOR, teu Deus»).

maneira nas mesmas partes. Cometemos tal pecado quase diariamente. Escusado será dizer que caí no pecado de cometer adultério com várias mulheres. Penso que dormi tanto com mulheres solteiras como viúvas aproximadamente quatrocentas vezes. Era tão frequente dormir com mulheres casadas que não me lembro bem da frequência. Com algumas mulheres dormi só uma vez, mas com outras dormi duas, quatro, cinco ou seis vezes. Vivi com algumas dessas mulheres, na qualidade de concubinas, por espaço de seis meses, um ano, dois meses ou dois anos. Também não me lembro bem da respectiva frequência. Sempre que me apareciam boas oportunidades, costumava aproveitá-las. Desflorei cinco ou seis donzelas que não conheciam homens. A uma virgem prometi de modo ardiloso que me casaria com ela e depois de ter conseguido que o seu coração se rendesse a mim desflorei-a. Porém, logo após a satisfação do meu apetite carnal, abandonei a donzela, quebrando todas as promessas por mim juradas. Outra donzela não queria copular comigo, contudo esforcei-me ao máximo para conseguir concretizar os meus intentos, utilizando até um alcoviteiro de forma a que este convencesse a donzela a tornar-se íntima de mim. Finalmente por meio de várias palavras mentirosas enganei a donzela e consegui copular com ela, roubando-lhe a virgindade. Depois de satisfazer o meu desejo carnal, escuzado será dizer, não cumpri nenhuma das promessas anteriormente prometidas. Ameacei uma outra donzela e desflorei-a, afirmando que apertar-lhe-ia o pescoço e matá-la-ia se não aceitasse a minha vontade. Após a satisfação do meu desejo carnal, continuei a sustentá-la como manceba por três meses. Cometi o semelhante pecado para com outras três donzelas, uma vez respectivamente. De vez em quando gloriava-me e deleitava-me sozinho, trazendo à lembrança os saudosos prazeres de que gozei através da cópula com aquelas donzelas e mulheres.

脚注24はかなり長いポルトガル語の評釈なので、一点に限り興味深い事実を日本語で書き留めておきたい。氏家幹人『江戸の性風俗——笑いと情死のエロス』（講談社現代新書、1998年）によると、「肌を合はする」とか「肌を許す」とかの表現は江戸期において、男性同士の深い契り、ないしは固い盟友関係を表現したという。しかも驚いたことに、この事実は『日葡辞書』によっても確認できるのである。『日葡辞書』の「Fada [肌・膚]. i, fadaye [肌・膚]」の項目を覗いてみると「Fadato fadauo auasuru」[肌と肌を合はする]。Ter ajuntamento o homem com molher. As vezes. Fadauo auasuru [肌を合はする]: se diz dos que se vnem, & estão amigos, mas não he muito vsado nem proprio」[‘肌と肌を合はする’男が女と性交すること。ときには‘肌を合はする’ということもある。盟約・統合しているとともに男の友人同士であるという連中について言うこともある。しかしこれはあまり使われな

いし適切な用法でもない]²⁵ という例文と語釈が見える。ポルトガル語動詞の *unir-se* には「(動物と) 性的関係を持つ」という露骨な意味もあるようだから²⁶、はっきりと「男色の関係を結んだ者同士」という意味であると認めてもよいであろうが、とにかくこの用法は適切ではないと断わっているところがイエズス会の出版物らしいところではある。

つまり誤解を防ぐために、ひとこと繰り返しておく、私はこのたびの訳注で当時の日本にはカトリックの性倫理とは別個の価値観・倫理コードが存在したと述べているだけで、主観的な価値判断はいっさい控えている。個人的な好悪を言うなら、私にはその手の人々に対する嗜好・興味は一切ありません。このコメントでも触れている醍醐寺秘蔵『稚児草紙』に見える坊主と稚児の痴態のかずかずは、鮮明なカラー写真で穴があくほど熟視しましたが、にもかかわらず『日葡辞書』風に言って *Satemo qeccôna monogia* [さても結構なものぢや] とは少しも思いませんでした。関心のある方は新潮社『ひらかな日本美術史』という二巻本の上巻を御覧ください(当地へ持参しなかったため著者名・出版年が明記できません。失礼をお詫びします)。

末筆となったが、流通情報学科の同僚である水野恵子先生(日本語史)には日本におけると同様、ポルトガルでも温かい御指導に浴した。質問がたまるたびにそれをお伝えし鶴首して待っていると、日本時間の早朝に懐かしい声で電話をいただく。そうして丁寧にお教を賜ったときの嬉しさというのは月並みな言葉では表現しきれない。必ず最後に言い添えてくださる「また何かありましたら、どうぞ」に甘えることがついつい度重なった。お詫びと心からの御礼を申しあげる。

²⁵ *Vocabulario*, f.76.

²⁶ 他動詞としての *unir* の一語釈 “Fazer ter relações sexuais (aos animais)” からの類推 (Antônio de Moraes Silva, *Novo Dicionário Compacto da Língua Portuguesa*, Vol.V, [Lisboa], Editorial Confluência, 3.^a edição, 1987, p.405)。